



“徐福さん”との再会

福岡県八女市出身（大阪市在住）

古賀安徳（勉強会参加者）

昭和30年1月20日、福岡県八女市川崎小学校の6年生の時、同級生や「童男山物語」の紙芝居を作られた木附先生とともに、山内の小高い山の中腹にある童男山の古墳を掃除し、集めた落ち葉を焚いてふすべて“徐福さん”の霊をなぐさめる行事に参加しました。その日が寒かった記憶はありません。2200年前の1月20日は、大変寒い日だったかもしれません。



「童男山ふすべ」紙芝居（川崎小学校6年生）

「童男山伝説」での“徐福さん”についての物語は次のようなものでした。

中国の万里の長城を作った王様の命により不老不死の霊薬を探しに出かけた“徐福”という人が、海を東へ東へと向かい、途中、嵐に会い船が難破して、息の絶えた“徐福さん”がここ山内に打ち上げられました。これを見つけた村人達は火を焚いて体を温め懸命に介抱したため息を吹き返しました。そして、気を取り戻した“徐福さん”は村人達のお世話を大変感謝し、「不老不死の薬は発見出来なかったが、それにもまして、人の情けを知ることが出来ました」と云い残して、この地で息を引き取りました。その後、村人達は、その地に“徐福さん”のお墓をたて弔いました。

その後の話ですが、戦時中、応召する時、古墳の岩のかけらを身につけておくと「船難」を“徐福さん”が身代わりに受けていただき、無事に退役帰郷できるとの言い伝えから、そのお守りをいただくと思う人々が、ことあるごとに少しずつ削り取っていったという戦争にまつわる傷跡も残っています。

古墳は、海拔約100mの所にあり、私が生まれた家は、当時の有明海の海底であったこと、地名の川崎の崎は「陸地が海に突き出た所」の意味があり、山内は浜辺だったのかといわれています。また、伯母の話によれば、「ふすべ」の行事は、山内の中でも、西上町（ここに、童男山への登り口がある）だけの行事で、小学生全員が参加し、古墳の室内は女人禁制のため女性は外の掃除しか出来なかったそうです。掃除が終わったら集めた落葉をふすべ、お菓子を食べながら長老から受けた伝説を下級生へ受け継いだそうです。

私はその後、故郷を離れ、全く“徐福さん”とは縁もなく、ここ、大阪（大阪市）の地で約50年も暮らしてきました。

今年の初め、新聞で「“徐福”の偉業を探る」という記事が目にとまり、子供の頃になじんだ童男山の“徐福さん”と同じ人ではないかと思い、“堺なんや衆”主催の勉強会に参加し、あの“徐福さん”と再会しました。この勉強会で、“徐福さん”は、単なる「不老長寿の薬」探しの人ではなく、数千人の童男童女、五穀の種、技術者を乗せ船出して、日本の文化の成立に大きな影響を及ぼした偉大な使者であろうこと、八女市・山内のほかに、佐賀県、和歌山県にも歴然として伝説が残っていることを教えてもらい感激しました。

勉強会を通して、奈良、京都の文化より、ずっと以前のロマンあふれる文化に触れ、懐かしく50年ぶりに“徐福さん”との再会を果たしました。